論文の内容の要旨

論文題目　シュタイナー後期思想の教育学的意味―「倫理的個人主義」への〈教育〉という観点から

氏　　名　河野　桃子

本論文では、シュタイナー教育（Waldorfpädagogik）の創始者として知られるルドルフ・シュタイナー（Rudolf Steiner 1861-1925）の前期思想と後期思想との関係を、「世界自己（Welt-Selbst）」への〈教育〉のための〈神話〉という、これまでの先行研究とは異なる視点に光を当て、再解釈した。また、この作業を通じて、シュタイナーの後期思想が、シュタイナー教育の実践においてどのような意味をもっているのかについても考察を行った。以下に、本論文の内容を章ごとに要約し、示すこととする。

まず、序章では、シュタイナーの哲学的・一元論的な前期思想と、神秘主義的・二元論的な後期思想の間に見られる「断絶」と「連続性」を巡る、これまでの先行研究の整理を行い、そのなかで本論文の立場を位置づけた。前期から後期にかけての変化については、シュタイナー自身が、方法上の断絶、内容面での連続性、という形で、断絶と連続性の双方を支持する発言・記述を遺している。そして、先行研究は、こうしたシュタイナー本人による評価をそのまま踏襲するものと、思想史的な考察を通じて、連続性・断絶を独自に考察するものとに大別できる。このことを踏まえた上で、本論文は、この後者の立場において、前期思想と後期思想の連続性を新たな観点から示すものであること、具体的には、神秘主義的・二元論的な後期思想を、「倫理的個人主義（ethischer Individualismus）」を実現する「世界自己」に向けて、人々を〈教育〉するための〈神話〉として捉え直すこと

で、後期思想においても前期思想から通底している、自由と倫理の両立への方向づけを描き出すものであることを示した。また、本論文は、この作業を通じて、「倫理的個人主義」への〈教育〉という視点が、シュタイナー教育の実践にも切り離し得ないものとして浸透していることを提示するものであることも示した。

次に、第 1 章では、前期シュタイナーが、後期の神秘主義思想とは真っ向から対立するような、マックス・シュティルナー（Max Stirner 1806-1856）の思想を高く評価していたことに着目した。この、前期から後期の間の思想的な変化は、一見したところ、両期間の断絶のみを示す証左とも捉え得るように思われる。しかし、本論文では、前期におけるシュティルナー評価を、理想的な倫理的状態を静態的な観点で考察したものとして、そして、後期における神秘主義的・二元論的な思想を、そうした理想状態へと人々を導く、一つの〈教育〉の手段として位置づけることで、両時期の思想を、一貫した連続性をもつものとして提示した。前期において示された理想的な倫理的状態とは、具体的には、「私」から自由になされた行為が、普遍的に倫理的な行為となるような状態である。シュタイナーは、このような状態が実現するには、人々が、自らの「私」を、それぞれの個性のもとにありながらも世界と同じ拡がりをもつ「世界自己」として捉え、行為できるようになることが必須であると考えていた。このため、それぞれの「私」を、経験世界における皮膚で区切られたこの「私」に限定する原因であるとみなされた不可知論を、できるだけ多くの人々が克服できるように、「道徳的想像力(moralische Phantasie)」を高める〈教育〉が課題とされた。本論文では、神秘主義的・二元論的な後期思想を、この〈教育〉の機能を担うものとして提示した。

第 2 章では、神秘主義的・二元論的な後期思想が、第 1 章で指摘した〈教育〉の機能を果たすものとして、徐々に形成されていったことを思想史的に跡づけた。シュタイナー自身が、後期思想における「認識の外部」についての描写を、とくに学問的な訓練を受けていない人々であっても「認識の拡張」の努力を行う上で有用であるように提示したものであると位置づけている記録に基づいて、前期から後期にかけての方法上の変化の背景に、自らの思想の普及に向けて読者・聴衆の層の違いに配慮した、シュタイナーの工夫を指摘した。シュタイナーは、こうした語り方の変更によって、前期の段階よりも多くの支持者を見出すことができたが、同時に、その神秘主義的な特徴は、多くの批判も呼び込むこととなった。そのような批判の代表例が、シュタイナーの後期思想を「神話」であるとして否定するものであるが、こうした立場は、ミュトスとロゴスの絶対的な分離を前提としている。本論文では、シュタイナーの記述・発言、および同時代の神話論を参照するなかで、シュタイナーが、自らの思想をミュトスとロゴスの統合のもとに実現させようとしていたこと、また、そうした思

想が、かつて古代ギリシアで神話が果たしていた機能――「一体となって知る（Sich-Einswissen）」ことを惹起する教育的機能――を、人々の間で再び果たすような、新しい〈神話〉として受容されるよう期待していたことを確認した。さらに、第 2 章末では、シュタイナーの構想した、このような意味での〈教育〉の「構造」について、二つの仮説的解釈(1)、(2)を提示した。

第 3 章では、〈神話〉の「内容」、なかでもとくに、「私（自我・自己）」の観点に着目し、主に、第 2 章末で提示した〈神話〉による〈教育〉の「構造」についての仮説的解釈の(1)――人々が、現時点での「認識の外部」をも知覚可能性をもつ「現実」として示す〈神話〉を通じて「道徳的想像力」を高め、そのことによって、自身にとっての世界の「現れ」を変容させることができるようになる（＝このことが、人々が「世界自己」としての行為により近い行為を実現していけることにつながる）――についての検討を行った。〈神話〉としての後期思想において、「私（自我・自己）」は、①日常的に意識されるこの「私」＝「低次の自己」＝「人格（Persönlichkeit）」、②再受肉の主体＝「真の「私（自我）」」＝「個人（Individualität）」、③「高次の自己」＝「世界自己」、という三層構造をもつものとして捉えられている。こうした内容について、〈神話〉による〈教育〉という観点から見ることで、②については、再受肉論の検討から、主として、「人格としてのこの「私」への囚われからの解放」という機能を指摘した。また、③については、キリスト論、とくに「ゴルゴタの秘儀」の考察から、「世界と一体となった「私（自我・自己）」についての「像」を得やすくする」という機能を指摘し、仮説的解釈の(1)が正当なものと言い得ることを、〈神話〉の「内容」のなかでもとくに、「私（自我・自己）」の観点から明らかにした。

そして、第 4 章では、〈神話〉の「内容」のうち、主に「認識の階梯」の観点に焦点化し、仮説的解釈の(2) ――〈神話〉においては、それに基づくことで得られる「現れ」が本当に「現実」に即しているかどうかを、自らの思考を通じて「問い直す」ことが繰り返し求められており、それによって、人々が〈神話〉の内容に規定され、不自由なあり方に陥ってしまうことが防がれている――についての検討を行った。〈神話〉において、「認識の拡張」は、前期とは異なり、①物質的認識（die materielle Erkenntnis）、②イマギナツィオーン認識（die imaginative Erkenntnis）、③インスピラツィオーン認識（die inspirierte Erkenntnis）、④イントゥイツィオーン認識（die intuitive Erkenntnis）、の四つの「認識の階梯」を上って実現すると述べられており、それに向けて修練による「思考の強化」を行うなかで、「明視器官」が形成され、現時点では「認識の外部」にある事柄も、知覚を伴う形で認識できるようになるとされている。シュタイナーは、こうした記述・発言を通じて、

読者・聴衆に明視者になるための修練という努力を求めるが、その一方で、実際に彼らが明視者になることにはこだわりを見せておらず、明視者による認識内容を「通用させる（gelten lassen）」という態度で十分であるとしていた。こうしたシュタイナーの姿勢について、本論文では、前期に述べられた「認識の拡張」と、〈神話〉における「認識の拡張」との位相の違いを明らかにし、その上で、後者に向けて取り組むなかで、認識される「現れ」に変容がもたらされること、また、その「現れ」をより「現実」に近づけようとする「問い直し」のなかで、さらに「現れ」が変化していくことを、前期の意味での「認識の拡張」として提示した。第 4 章の後半では、こうした「認識の拡張」がもたらす教育学的意味について、オイリュトミー療法士とその養成者へのインタビュー調査から考察し、シュタイナー後期思想が、シュタイナー教育の実践とは切り離し得ないものであることを述べた。

終章では、本論文の内容を概観した上で、シュタイナー教育の実践から後期思想を切り離すことの問題点として、①その実践を子どもの操作可能性の観点からのみ捉え、より望ましい教育的コントロールへの足がかりにしようとすることを、シュタイナー教育から識別することが困難になること、②最終的に目指されている人間像・社会像へのまなざしが切り捨てられ、〈教育〉が本来目指していた「倫理的個人主義」の実現とは正反対の、閉鎖的な姿勢を呼び込む可能性が出てくること、の二点を指摘した。また、最後に、本論文に残された課題を示し、その上で今後の研究の展望を提示した。